



自然堂千句

乾

中村俊定文庫

文庫 18

844

1

自然堂千句

卷四 楚辭家

晦菴序詩經人事法於六天道備
於上無一理之不具也俳諧蓋亦
爾芭蕉翁一旦看破古俳詠自為
一家之風哭鬼感神之妙亦致為
天不降之如冰軌六於是乎一家
之法後人授之稱曰正風也其吟
詠體裁存者若干卷翁有意于

天田經書

子句者而未果夙朗憾之有年于
茲耳於此憤然自賦子句如其規
則悉本翁遺言其他聯句引證有
據不必私也閱之了道人奉具備
金聲玉音六振蓋為後學之軌範
也嗚呼有芭蕉而有正風有正風
未全夙朗豈不大成乎可謂芭蕉

之忠臣而後生之先生也子句為
物足育之材其至也或致鬼神素
乎

于時天保甲午周正應茶靜雪

武江蕉字獨立閑花林四山識



凡例

祖翁正風樂護の事し後と右来るも用未だる格式及び
去禮下はのりしはし然と者たを福一書有はる
意は一宗の則ちの可定とすもはのりしは宗の
可は後をのりしはのりしはのりしはのりしは
と終るはのりしはのりしはのりしはのりしは
一書を得るはのりしはのりしはのりしはのりしは
一正則備はのりしはのりしはのりしはのりしは
可はのりしはのりしはのりしはのりしはのりしは
可はのりしはのりしはのりしはのりしはのりしは



俳諧連歌獨吟十百韻集卷之上



自然堂風朗

十句表

夕如くや不二もきくきく子偶田川
風又たの竿の睡ふも
裏過葉れくく答む喜もふ
懲解ふとくをたぬふ此ん怪

根をのこしつゝ子乾踏ら漏り葉
系をこしつゝ子乾踏ら漏り葉
りまこれ樽を向うら返り候
まきつゝ子乾踏ら漏り葉
造作をばつゝ子乾踏ら漏り葉
早稲をばつゝ子乾踏ら漏り葉

第一

次よりまればつゝ子乾踏ら漏り葉
つゝ子乾踏ら漏り葉
ふつゝ子乾踏ら漏り葉
律義具負もなつゝ子乾踏ら漏り葉
見はつゝ子乾踏ら漏り葉
結句を換はつゝ子乾踏ら漏り葉

良吐ちふあまのうきとく
かふあまのうきとく 秋ふく秋ふく
人高き海いなるよ 言強味の能
かき 海婦さ進く 細竹乃 笠
はゆくときさうきあられかゝるを江店
牡子 仲夏に 芝枯 振舞ふ
河原侯よとく 事たれ 露し物
親世 糸織り ときさく くとすは

蝶とたれとく 流業から 靴とく
うきとく すすぬ 子梅は 枝
家老の代 進も心さく 事とく
うきとく 針とく 糸とく 福の事とく
牛高とく 富山とく 力の利とく
春は 土申は 安富も 甲斐も
あまのうき 仕あつて 巧の 操合機
短 楽おとく くと 尾よれ 岸 欠く

夢の物もちかきる情ある眼の光を
小を海にゆきあふる小を
片をふとて言ふ晴る路をたぎ
畦も河をも棘も山も高松
よんをよや和泉も旅中をよ
男も美ふるも多羅羅も
和もふ夢も流の軒をぬるる
花もつるも色もあふる比

進くるも嵩たるるもはかり
あまのもも土植も花も
刺らるるもあふるも世話の
あまのももあふるもあふるも
冬お撲全体も理ふおあふるも
あまのももあふるもあふるも
あまのももあふるもあふるも
あまのももあふるもあふるも

袖はすれむら〜とさき時の中
井きぬのされと河浜に眼の下
大座の客き信持中ら座下
座方あがらききき深き
心海きい花相と阿そにあぬ
花台れお山と月のあし志後
野分か〜豊の急うれ海干あを
下場とさ〜しよ豆あ〜乃下
不

き〜〜と眉も指らぬ驚異を
あ〜ゆあわき新伊勢あは枝
寒〜あふ赤鯉〜は〜せあ
浦尾若 衆乃難ゆさふ〜
鼻〜終り出〜川〜持子七あ
三里急〜草鞋喰法
田〜り進〜い嗅神〜
中除縁〜瓦わさ〜

子に終るを慕ひてのしりぞきては子孫に
大方より一きうおきぬ法 徳
金十山乃 用蓮 流るるかけ法とる
くしとる 津くおと生 植 境く之
可きあき する 蒸くもる 又 地色 妙
蟻 登り けりけり 衆 家
交 突 如 木 撞 ち せん けり 日 一 日
し とも せり けり けり けり けり けり

しん

かやくと何念らとよむ 月の 夢
神 涼 え けり 寺 婦 ぶ 夕 飯
産 ち けり 如 乃 並 木 ち 知 子 入
禪 寺 加 夢 けり 小 得 けり けり けり
年 夢 けり けり けり けり けり けり けり
舟 ち けり けり けり けり けり けり けり
生 納 けり けり けり けり けり けり けり
吾 屠 けり けり けり けり けり けり けり

又やに 露と風とをたらし ちかしの神家
れを 喰さるゝのま 宮を 行前
念を 雲押とえ 念の けちち
ふると 可美しから 遷出くから
りさるゝいお 老を きたるむら
義乃 ちかくさう なる 産るれと
福め ばきく けきしとさく 神の
四隅の 廣い 大日 ちん 臺

旅人の ちかきと 友たろ 所書
とれと 骨とも 継ぐ 旅業の 根
大河を 沖汲 平ゆく 寅刻 鐘
万石を みるゝ 海外 乃谷
むらし かく 削れ ちかき 山 茶さうり
舞れ 舞の 舞は ばさる 舞方

第二

鶯泣啼きの下と 潜る如く
小半時をらききむ 春のちりつと
可たしと起りて 寝るをなす 偶境を
作すやとむと 見ゆれば 管あり
所乃戸子 正心丹 春の 札
あえん如やむ 海より 氣の 札

管宴れ 月の 覺悟と 志すとなん
念くらの 夢の 春の 秋 涼
響打と ち編む 春の 去かたを
小 毎半 ち中 夢を ちり ちあは
全体 ち百 ちち ちる ちる ちる ちる
枝 露す 滴を ち本 統 ちる 聾
ちち ちち ち 棟梁 職を せぬ ちち ち
所 大 費を ちち ちち ちち ちち ちち

兼もかきく西月さるる日の時
ゆゑさくくとそのまほさる 鶴
と風李阿比轉乃ほむる不陣屋本
不楚以元より此 海寺未法くまか
湯舟わく垂ふの舟貝を吹出しく
下海乃新こ此 既 福おさる時
小部屋まきくこれ婦のまにわさけ
氣のまきくさる 脊中さるうま

魚拭をかききくこれぬ法言の訂
清より新 魚の婦さる 友の美
船牛れ甲乃台を 文のまよま
舟棚掃く子土 下さる
世意用なき香盒の形りぬ桑なまわ
あら鏡まきく 里乃志くまきく
鴨わ川むらさきの月めはらまきく
世これえあまをさる 未聞く

菜のふゆきもふゆきもくくくく
はくくくくくくくくくくくく
奔走り子も抱くもくくくく
子もくくくくくくくくくく
まもめめめめめめめめめめ
今もあけあけめめめめめめ
まもめめめめめめめめめめ
措くもくくくくくくくくくく

西もくくくくくくくくくく
小くくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくく
まもめめめめめめめめめめ
くくくくくくくくくくくく
真もくくくくくくくくくく
二階のくくくくくくくくくく

ぬくささと海に遠くささるる海をささ
九十よきささるる面うり以合ひぬ
耕後と指目れさぬぬ糸綿さ
橋うりささるる分り本に町
屋うりささるる重箱さな活命講
柔うり物さ指し啼ぬ勢勢
乳母をささるるさ子も中さうりさ
懐の風は身指うりま 歌

松尾れ裏と祝けた四葉川
やとささるる指し女房ささるる
お花をささるる指しささるる
風の薫ささるる乃遠くささるる
むささるる草れささるるささるる年
ささるるつささるる遠くささるる日
海向しささるる啼ぬささるる事
飯ささるる外 用ささるる 鐘

夏中の涼きよきころなるに任給取
みぬ終浦をそぬきやる音
みおくと志す者雨を人あらし
換料借るあらしぬぬ 並
法堂場を鏡の鏡をばあさる
玉子丸売と赤丸乃とあらし

第三

坂さしししし清きれき上外
草中々小蝶の指り赤丸牽
鮎此鯨組板ぶし川岸かしり
さつとらまるとねりあけしぬきし
裁着をそつねハ通るぬ序落あ
七十向う々阿あ新株の本
量法ししらぬりしししむく巳子の
柑子はあけの赤なき免よあ

懸斗竹をあ〜〜と鳴るる子綿衣
へのき風乎 忍境乎 鳴る
世側きあちなるを呈る中二階
葉のか〜ぼ〜と子綿衣れ操やう
睡心蟬を鳴〜 赤きるさ〜と鳴ら
卵の白れ清き字きはほほひそは
よきよ〜と鳴る葉の中にとりちあき
洞手さ〜〜 崖の崩ちむ

交るる色路を鳴る 蛇啼
懸流ら流るる 鳴るる身代
ほ袋を敵えき 泣くぬすのまじ
〜の自むつ 鳴る方乎 赤家
苦む〜と鳴る〜 鳴るぬすのまじ
たあ〜 此を〜の 鳴るぬすのまじ
見り腕〜と鳴る〜 鳴るぬすのまじ
土大黒方火乎 鳴るぬすのまじ

起るるなるまゝに幹系ハ新系
現銀醫者の苗字きつ福系
不化達も温槽さうちりく
寛政本を株をかりて
不費く筆子ほりぬ 更 考
河らつと竿平 かけと新中
内中つと後家老あおしり
く山きれ 尾舟乃 厄しげな親

上六

海鏡とはさきも徳小婦
きつと赤心 せうと下地 死
きつと魚子 月あや 蒸の蒸
換子とて裁川 西瓜とて四山
山並たしを井筒うらるる泉
りるるさうらるる ところ 綱子
赤人あきさく 笑ふ 眼面うら
十年 幸と 松かき

片氣此やうにあらざるに 網アヒ下地
昼乃多 福 知くもく 宛 宛 倉
新アヒかく 結白たここれ 志う 阿アヒり
海流くもかきくも 爲 掃の志 往
親 姉くも 持予 志くも 志くも 志くも
番 既 宛くも 志くも 乃 換 抄
宗 作 志くも 志くも 廣くも 河 流くも 志
以 阿アヒりの 情 如 喜 志くも 志くも 志くも

ぬた 情 情 志 利 志の 阿アヒ志の 志
望 志 志 志 志 志 志 志 志 志
清 志 志 志 志 志 志 志 志 志
又 阿アヒか 志 志 志 志 志 志 志
阿アヒ 志 志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志 志
小 用 志 志 志 志 志 志 志 志 志
大 切 志 志 志 志 志 志 志 志 志

素多孫く大くうに能くお坊
いつか原を北きうお明き
別きおれと備り有る追く子
手無常くう、何くぬ、船小屋
孫多おれをむくうに以賽せしむ
溪的れ青なる井と千きくある
和氣くも系て子自とおれらに
い〜〜き埋る九十九里 溪

上十八

慮駕く〜お〜さめたけれ増り中て
空種き〜誘き〜か〜の大仏
きう肥き田をへひ〜〜おきあ
ぬ〜れ足〜〜きあらぬ無亮
養酒屋名おれお掃く〜〜
垢籠山伏方志〜〜さきおる
候〜〜の幅と長〜〜れ何〜〜
お〜〜きあ〜〜〜あ〜 舟

蚤ちきりあきくわらふの如く
今なきも十口きくしきく
香具屋のあり髪をた刀
あはれきりしきくあはれ
いさよみち跡荷も花えも
温泉乃かき交れ行架も
春も此喜れときけの耳の
くわくわく 船も 霍も 雲の

芥子とハ血の垂る松もあきく
越后もあきくあきく
去面と九六と衣も算
あき七路もあきくあきく
あきあきあきくあきく
あきあきあきくあきく
あきあきあきくあきく
あきあきあきくあきく
あきあきあきくあきく
あきあきあきくあきく

宣集冥集ふとる路へ思つあふ
其中うさへくかき浪のすふ
月あま田おれふこみ明結露
野あま来このを去らぬ端端
醒り并れ冷妻一病 沛踏うぬ
久座といふと やらるるさ婦ふ
終乃語らうりそ 何平指 以
法んと始りこころ過る百 風

と去る尾ら久このをさるるあ
あなうに鏡れ去らるるこころ
ふさるるこころ始り露とあふ
かきるるあはれと 誰ふあふ

むらたふれ河をに指し保しき
子大も是うぬ庭の文彦
らるる天目たきり河漕めり
清・危丁をま〜と磨く
お〜しお玄年お〜しおお素者
とちり〜おちを起らあ〜お
日のふぬ〜おうあ留 義 夢〜
おまき〜と〜 阪を け へ 親

親乃あ〜うむら 親翁をせぬ 積り
をき〜し〜う ぬ 意 娘 沙汰も
お〜しお 灯 巻 ち〜と〜と 西〜
前 け 大 ぶ 新 平 也 来 糸 唐 首
於〜庵〜しと 市 場 ち〜と 橋 子 前
と 文〜し〜 踊 ち 根 手 ち〜と ち
其 從 法 平 毎 日 の 越 々 冬 所 雲
獨 々 且 那 乃 多 々 ち ち ち ち ち

ちりまをうな光琳畫れ和の美よ
氣をうけりる 晴を云や川く
去髪を洗墨を流のかをうき
油櫃を油おとれ 遠 河
うきくと墨をうきふいふをうき
牛房を流の美をうきうき
襦袢外へ大女真子を流うき
ふりまをうき 大の美をうき

帥をうき 今度志おと 安樂寺
雲をうけりる 板襦袢をうき
化粧坂をうき 撫をうき 麦をうき
夢をうき 実をうき 田をうき
うきをうき 州列 苗をうき
人 田をうき 箸をうき
河 橋をうき 出ぬんをうき 常をうき
りるをうき 船をうき 丁をうき 魚をうき

本町名の平場ゆゑ乃尺あり
煉と銘をく 非酒と志海香
志の智直の丹心久く出づは
不南の禪を 強くあつた
貝母けと皆持く 奇於輕安
夫去平 晴と西のりさ
一かけの産寧坊を 志つ下
親の笑歌をうけ かりり

新漢をちやとく 与る釜加減
羽幕持く 衆眞追平堂川
法真向をけ世のわく好を
それの 平 衆乃ちあり
油あつて 月名美直をれ生を撰
おさ地と 向く 衆善はふ
大文字乃 強け 衆乃 平
去文をふ 薩又 志一に 口 印

上ニ志もと少く執る振ても何し村
かすうう宮老居又えあく家
まれうふ如儀の千も入さうに
志をを参り池ハ底子局千交る
内路乃天部屋といふを院身御士
あふ屋ハ糖千交るひつひく
梅白くあふふ本込れ底の笑ひあ
えとのつこさう 偏しかくなる里

山もあもやうう冷おそ月め程
落由くそれ法うふあうせふ
多拭又轄購者若く引あす架
はき人の志地ぬ草履片く
ふろ川く傘あへくき親赤の着
尾根あさう往てら休む子あま
賣るうあふ免うくとも留志さふ
母波あふふと坂れとあま

仙洞へ化糖のまじり十糖いふ
経河よりいぬ絹巻粉ねき
日れ路次を穿てそ志まぬ状の常
歳一説よりまじりては地
空雲結あはれしよ入る枯木島
重方降ぬく雲神のまじり
大きうん子火の足たふ津こあひ
解りあききれぬお刀

上二六

引越る所の埃を吹とくし
美れ落るまき赤山雞尻
細火と山雲と呼吸し月を色
あま川と柿乃魚地くとすふ
入るに盡る作山の縁暗さ
正観音と洞よりうらむ
百条もあれまゝをさるる
空はやら舟の音をわらふ



頼りぬゆゑと志と心の長さ
 とちうこれ静かき湾ふ桝垣
 風景き美戸内遠る巻の巻
 志と強さくと見るとさあさあ

